
仮面ライダーブレイヴ

みやびわたる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーブレイヴ

【Nコード】

N8010X

【作者名】

みやびわたる

【あらすじ】

“感情”。それは如何なる状況においても、人類の歴史と密接に関係している。ある日、感情に反応するという未知の鉱物『フィリウム』が発見された事で、平凡な日々に変化が生まれた。しかしそれが、数多の人々の運命を変えてしまう闘いの引き金になるとは、誰も予想していなかった。様々な欲望や願いが交差する日々に現れた仮面の戦士、ブレイヴ。勇気の化身は正義と悪が入り交じる世界で、自らの信念を貫けるのか。

序章・PROLOGUE 業火と青年（前書き）

はじめまして。みやびわたると申します。はじめての執筆なので、かなりグダグダになると思いますが、読んで頂けると嬉しいです。

序章・PROLOGUE―業火と青年―

その日はいつもと様子が違っていた。曇り空が紅蓮に照らされている。町外れに建てられた巨大な研究所が爆炎をあげながら燃えているのだ。科学薬品や精密機器が大量に置いてあるせいか、火の勢いは止まるどころか逆に強くなっていく。

そんな地獄と化した敷地の中を、1人の青年が息を切らしながら走っていた。

「……ハア、ハア……ハア……」

服装から察するに高校生のようだが、服が所々焼け焦げていたり無数の切傷があつたりとボロボロである。

「……ハア……ハア……、……もうすぐ……出られるぞ……」

手に持っている物としたら学生鞆、そして黒と藍色の無骨な機械ぐらいだ。携帯もあるが場所が場所だ。電話なんてこの火の海の中では何の役にも立たない。それにこれだけの大火災だ。既にほとんどの人が気付いている筈。それなのに誰も来ないということは、近付けないくらいの被害だという事。助けは来ない。だったらひたすら走って此処を出る。それが今の彼が考えられる最善の策だ。

しばらく走っていると、150mくらい先に正門が見えてきた。「よし、もう少しだ」と青年が思ったその時、

“ヤツ”はそこにいた。

正門と青年の間に入るように“そいつ”は此方を睨んでいた。人ではない。鎧のような物を纏って2本足で立つてはいるが、人とは似ても似つかない姿をしている。

『グブルルルル……!!』

異形はどす太い唸り声をあげる。明らかに敵意があるようだ。気の弱い人がそんな光景を見たなら、あまりの恐怖で動けなくなってしまうだろう。

「……………」

だが青年は、落ち着いていた。じつと異形を見据え、静かに呟く。

「……………どうやらアナタは、さっきの怪物と同種みたいですね」

彼は手に持っていたゴツゴツとした機械を右腰に当てがう。すると

機械から帯が飛び出し腰の周りを一周すると、カチャツという音と共に機械にはまり無骨な形状を安定させる。

「……僕には…やらなきゃならないことがある。……こんなことで死ぬ訳にはいかない。……そこ……通してもらいますよ」

独り言のようにボソボソと呟いた後、懷から取り出したメモリーカードのような物を、機械の側面にあるスロットに差し込む。

「ゼントル……スタンバイ」

機械から電子音声が流れ、対峙した両者が構える。そして青年は静かに言った。

「たとえ孤独でも、僕は闘う。皆を…護るために。……変身」

「ゼントル……セットアップ」

それは、目の前にいる敵に対して、未来で待ち受ける運命に対して、そして自分の心に対して突き付けた、自らの覚悟を意味する言葉だった。

序章・PROLOGUE（業火と青年）（後書き）

改めまして、はじめまして。みやびわたるです。僕のつたない駄文を読んで頂き、……………っありがとうございますm（――）m！！！！それにしても、小説って文章だけで情景を表現しなきゃいけないから、思った以上に難しいですね……。感想でアドバイスとかいろいろ指摘して頂けると幸いです。更新時期については、ペースを掴めるまでバラバラになってしまうと思います。ご了承下さい。それでは、これからよろしくお願いします！！

第1話・BEGINNING（科学者とフリーター）（前書き）

どうも、みやびわたるです。第1話、書き上げました。5000字
って結構な量行くんですね（-o-;）。10000超える人はす
ごいなあ…。では、スタートです！！！

第1話・BEGINNING～科学者とフリーター～

初夏、草木も青々と茂ってきている。気温も日に日にながって、夕方になつているにも関わらず、体感温度は確実に高くなつていく。

「……あ、ああ……暑い……」

「もうっ、そんな今にも死にそんな声出さないでよ。びっくりしちゃったじゃん」

2人の若い男女が会話しながら、繁華街を歩いている。

「んな事言つたつてよ……。このところ毎日ピンカン晴れだぜ？鈴奈、お前よく平気でいられるなあ？」

所々くせ毛で、赤毛の混じつた黒髪の青年、さきはら しょうじゅ笹原翔がダルそうな顔で答えた。

「翔ちゃんが暑がりすぎなの。まだ夏にもなつてないんだし……、周り見てもダルダル……としてしてる人は翔ちゃんぐらいです!!」

セミロングの黒髪の女性、あさひ すずな旭鈴奈はキツパリと言い切る。

「へいへい、可愛くなる為とか言ってる鈴奈だったら、暑さなんか気になりませんもんな」

「へ？かわ……かわい？……え……ええと、えと……そ……そんな……こと……ないよ……」

鈴奈は翔の言葉に激しく動揺した。鈴奈と翔は幼稚園からの幼なじみ。互いの両親も仲が良かった事もあってほとんどの時間を家族のようと一緒に過ごしてきた。そうしている内に、鈴奈はいつの間にか翔に恋愛感情を抱くようになっていたのだ。

そんな彼女は顔を真っ赤にしてモジモジと下を向いてしまう。翔本人は皮肉で言っただけなのだが……。

「ん？鈴奈、どうした？顔赤いけど、大丈夫？」

「……あつ、え……いや、これは……えとお……そのお……」

翔は鈴奈の変化に気づき、屈んで鈴奈の顔を覗き込む。急に覗き込まれたことで鈴奈の焦りは最高潮になってしまう。翔はそんな彼女を見て、

「……なるほど。そうだったのか」

と何かを察したような顔をしている。鈴奈が「一体何が解ったんだろっ？まさか……」、「とドキドキしていると、

「……鈴奈、………やっぱりお前も暑いんじゃない！暑いなら暑いつてそう言えばいいのによお……。」

「………え？」

翔の見当外れな言葉に鈴奈は啞然としてしまう。

「ハア……。オレには暑がりとかダルダルとか言っておいて、自分だって変わんないじゃんかよ。ホントに大丈夫？あんまり我慢しちゃダメだぜ？」

「……………うん。ごめん……………」

鈴奈は翔が心配してくれる事に感謝しながら、内心複雑な気持ちだった。翔が恋愛とかの類いに対して疎いのは、子供の頃からあんまり変わっていない。デートに行っても、プレゼントをあげても、翔は彼女の気持ちにはまったく気付いていない。鈴奈とは家族のような関係だと思っているから尚更なのだが、此処まで度を超える疎さを持つ、恋愛の「れ」の字も知らない男を見ていて、鈴奈は焦りや不安を感じているのだ。

「でも、鈴奈にはオレの就活に付き合ってもらった訳だし、それで体調崩されちゃったら鈴奈の母さん達に申し訳ないし……。ありがとな」

しかし性格はとても優しく、いざという時は頼りになる。そんな彼の人柄に、鈴奈は惹かれているのだ。

「ううん、あたしは平気だよ。それより、今回の面接はどうだったの？」

「……………今回も多分ダメだろうなあ。何社も受けてるとわかるんだよ。落ちる時の面接官の顔とか、声の感じとかでさ……。……………くそっ、

この状態で1年経つよ……」

高校卒業後は完全に独り立ちさせる、という笹原家の教育方針に従って翔は家を出た。しかし部屋を借りるお金もなかった為、鈴奈の叔母、旭奈津子あさひなつこが営んでいる喫茶店の2階に住み込みで働かせてもらう事になった。

ただ住まわせてもらってちゃダメだと思い、翔は休みの日にいろいろな会社の面接に行っていたのだが、なかなかいい結果を得られずに現在に至ってしまったている。

「……仕方ないよ。最近は就職難って言われてるんだもん……。それにもしダメでも、奈津子さんの喫茶店があるんだし……。……次、頑張ろ？」

「……そうだな。……じゃあ、そろそろ帰ろっか？」

「うん!!」

2人が家路につこうとしていると、

「ちよつ、止めてください!!!」

何処からか女性の声がした。声のした方を見ると、女子高生が2、3人の不良に囲まれていた。

「へへへ、いいじゃん。遊ぼうぜ」

「そつだよ。ほんのちょっとだけだつて」

「……誰か…助けて……」

少女は困り果て、今にも泣きそうな顔で周りに助けを求めている。

「ドラマとかでああいう人達を見るけど、ホントにいるんだね。ねえ、翔ちゃん………ってアレ？翔ちゃん？」

鈴奈は不良と女子高生を見た後、翔のいる方を見る。だがそこに翔の姿は無く、彼が着ていたスーツの上着と鞆が放り投げてあった。そしてもう一度さっきの男達を見ると、

その時不良達は、怖がっている少女を無理矢理連れていこうとしていた。だが突然、

「グアッ………！！」

「おい、お前ら！何やってんだあ！！」

「あゝ？何すんだよこの野郎…うぼお！！」

翔が不良達の1人に殴りかかっていた。そしてそれに気付いたもう1人の顔面に裏拳をかます。

「あつ、今の内に逃げて！！」

「……は…はい！！」

「チイツ、逃がすかよ！！」

翔に呼びかけられた女子高生は言われた通りに逃げようとする。だがそれに気付いた残りの1人が彼女を追いかけて、捕まえてしまう。

「きゃああ！！」

「へへへ、捕まえたぜ……。おい、スーツ野郎！！こいつがどうなつてもいいのかよお！！！！」

男はポケットから折りたたみナイフを取りだし、少女に突き付ける。

「クソッ！！」

人質を捕られ、注意が逸れた翔を見て、劣勢だった2人が好機とばかりに翔をタコ殴りにする。

「はっ、動きが急に鈍くなったなあ、おい！！！！」

「グハッ！ぐっ、ガハッ！！」

そんな光景を、鈴奈が心配そうな顔で見ている。

「……もお、何やってるのよ。でも、あたしが行ってもなあ……
……どうしよお……やっぱりあたしが……！！」

鈴奈は翔達の方へ走り出そうとした……その時、

「………待ってください」

鈴奈は突然後ろから声をかけられた気がした。振り返ってみると、
白シャツ、黒のジーンズを着て、天パで黒髪の若い青年が此方を見ていた。青年は翔を指差しながら鈴奈に尋ねる。

「あの、彼のお知り合いの方みたいですけど……、よろしければ
僕が行きましようか？」

「え？でも……」

鈴奈は突然の出来事に、どう答えたらいいのか解らなかった。鈴奈
が戸惑っているのを見て、青年は続けた。

「大丈夫です。すぐに終わらせますから」

彼はそう言つと、身を屈めて静かにナイフを持った男に近づいて行
った。

ナイフを持った男、はらたけしや原田俊也は自分の仲間に殴られている翔を見て
ほくそ笑んでいた。

「へへへ…。どういつもこいつも、俺に楯突くから悪いんだよ……」

ナイフを突き付けられた女子高生は涙目になって震えていた。どんなにもがいても、体格の差もあってビクともしない。

「あの……」

横から急に声をかけられた事でビクツとなってしまった原田だが、すぐに冷静になるとナイフを持った右手が掴まれている事に気付いた。掴んだ手を目で辿っていくと、そこには優しいような青年が立っていた。

「彼女、怖がつてるみたいです。離してあげてくれませんか？」

「なつ、何だお前。離しやがれ!!」

原田が手を振りほどこうしたが、その腕はほとんど動かなかった。外見は非力に見えるがその力は本物だ。表情はにこやかではいるものの、その目は恐ろしい程の迫力に満ちている。

「離すのは……アナタです……!!」

「痛っ!!……ぐあっ!!」

青年は原田の右手を外側に捻りながらナイフをはたき落とすと、流れるような動きで女子高生を原田から引き離し、原田を蹴り飛ばして距離を取る。彼は少女の無事を確認すると翔に向かって叫んだ。

「キミ！！こっちはもう大丈夫です！！」

それを聞いた翔は、男達の1人が放ったパンチを左手だけで受け止めると、

「誰だかわかんないですけど、ありがとうございます！！」

掴んだ腕をグイッと引き寄せると、男の顔面に渾身のパンチを放つ。男が倒れるのを見る間もなく、後ろから襲いかかるもう1人に後ろ回し蹴りを打ち込んで卒倒させた。

「さあ、後はアナタだけですよ？」

青年は翔が不良2人を一発K・Oさせたのを見て、最後に残った原田に問いかける。

原田は思考を巡らせる。……もう人質に使えそうなヤツはいない。武力行使で突っ込んで行っても、このバカ強い2人に勝てるとはとても思えない……………

「……………チイツ！！」

原田は苦汁をなめたような表情で舌打ちをすると1人で逃げて行った。翔に倒された2人は完全に伸びてしまっていた。

「……………大丈夫ですか？傷だらけですけど……………」

「え？ああ。まあ、なんとか……………」

伸びていた2人が目を覚まし、原田の逃げた方へ慌てて走って行った後、青年は翔に話しかけた。彼の目に先ほどまでの迫力はなく、優しさのこもった目だった。翔は所々赤く腫れ上がって顔は数ヶ所切れていた。

「僕は氷室彰ひむろあきと言います。25歳、科学者をやっています」

「科学者…ですか…。……………あつ、オレは笹原翔って言います。20歳で……………フリーターです」

2人は互いに自己紹介をした。翔はフリーターと言う事が少し恥ずかしかったが、彰が何も言及せず、「よろしくお願いします」と笑顔で言ってくれたのをありがたく思った。そして翔は彰に質問をした。

「あの……………、どうして助けてくれたんですか？」

「うーん……………、ひとつはキミが大勢でボコられていた事。もうひと

つは、彼がナイフを彼女に突き付けていた事でしょうかね。女の子を人質に捕るのは許せませんでしたし……」

彰は横にいる女子高生を指し示しながら答えた。少女はまだ震えてはいるものの、だいぶ落ち着いてきてはいるようだ。

「君、名前は？」

「……………篠原…亜美です……………」

篠原^{しのはら}亜美^{あみ}は翔の問いに静かに答える。彰が、彼女の連れはいないのか、と辺りを見回していると、

「あつ、いたいた!! 亜美いゝ!!!!」

「……………愛理ちゃん!!」

遠くから亜美を呼ぶ声が聞こえ、亜美もその声に応える。愛理という彼女も亜美と同じ制服を着ていた。

「この子のお友達の方ですか？」

「うわっ、イケメン!!……………亜美、あんたもしかしてこんなイケメンにナンパされてたの!?……………うわあ、いいなあ。もっと早く亜美見つければ良かったなあ、ああああ……………」

彰を見た愛理は一人で興奮してしまっている。彰と翔が対応に困っている、亜美がそんな彼女を現実に取り戻す。

「愛理ちゃん……………。この人達はね、私が変な人達に絡まれているの

を助けてくれたんだよ？」

「え？そうなの！？亜美、大丈夫だった？怪我してない？」

「大丈夫ですよ。彼女に怪我はありませんでした」

愛理が心配そうな顔で亜美に問い詰めるのを見て、彰が代わりに答えた。

「良かったあ……。ホントにありがとうございます。アタシは西^に宮愛理^{しみやえり}です。亜美ったらひどい方向音痴で、アタシがついてないと、すぐにどっか行っちゃうんですよ」

「そうだったんですか……。亜美サン、次は気を付けて下さいね」

「はい、ありがとうございます。それじゃあさよなら」

彰が2人が仲良く帰って行くのを見送った後、翔と話の続きをしようと視線を変えた。そこには……、

「もうっ、翔ちゃんのバカ、バカ、ばあかあ（怒）！！あたしは警察呼ばうって言おうとしたんだよ！？なんで考え無しに突っ込んで行っちゃうの！？信じらんないよ！！！」

「いやあ、気が付いたら殴ってて……っって痛っ！！なんで鈴奈が殴っ……痛いから……仕方なかったん……痛いって！ごめ……痛いっ……ご、ごめんなさい……！！！」

彰がさつき話しかけた女性、鈴奈に翔がポカポカと（グーで）殴られ、怒鳴られていた。そんな光景を、彰はただ苦笑いしながら見ているしかなかった……。

所変わって、翔達のいる場所からかなり離れた路地裏にて……、

賑やかな通りから一本外れているだけなのに、光はほとんど入らず、薄暗く、湿っぽかった。原田はそこで息を切らし、座りこんでいた。

「……ハア…ハア…、ちくしょう、どいつもこいつも…つかえねえ野郎共だ……」

一緒にいた2人も翔にやられ、自分は彰にいと簡単に亜美を奪い返された。正直に言くと、原田はそんな2人が怖くなって逃げ出したのだ。

「……ハア…ハア…俺はたった1人で頑張ってきたんだ……。親にも、友達にも、見捨てられて……。それでも強くなったんだ……。俺が最強だ……。俺より強い奴なんか…社会も…人も…、…何もかもいらねえ……！」

……1人になると、ついつい本音が出てしまう。でも、本当は違うんだ……。ホントは……。俺は……

『力が欲しくはないか？』

突然、暗がりから声が聞こえてきた。低く、何かでフィルターが掛かったような声だった。

「！？……誰だよ……？……誰なんだよ……！？」

原田は暗がりに向かって叫んだ。だがその声は、恐怖でうわずっている。

暗がりから聞こえる声は、原田の問いかけには答えなかったが、更に自分の話を続けた。

『お前は、何もかもいらない、と言っていたな。つまり、全てを壊したい、という事でいいんだな？』

……壊す？全てを？何を言っているんだ、コイツは？そんな事したら……。でも、そんな事が……そんな事が……

「…………でっ、出来るのか？そんな事が…………」

『お前が…………それを強く望むのなら…………』

曇った声の主は、ゆっくりと原田に近づいて行った…………。

第1話・BEGINNING～科学者とフリーター～（後書き）

『ブレイヴ』第1話、如何だったでしょうか？自分ではいい感じに出来たんじゃないかと思ってます。感想お待ちしてます。さてさて、次回はやつとライダーが出せる予定です。後、まえがき&あとがきにちょっとした事をやろうかと思ってます。お楽しみに（＾Ｏ＾）
ヾ！！

第2話・INDIGO 骸骨と剣士（前書き）

ども、みやびわたるです。（＾＾）

今回から、このまえがきのスペースに前回までのあらすじみたいなものを書いていきたいと思います。それではスタート！！！！（・・）
¢

前回までの「仮面ライダーブレイヴ」は……、

笹原翔「鈴奈、お前よく平気でいられるよなあ……」

旭鈴奈「翔ちゃんが暑がり過ぎなの！！」

笹原翔「ぐっ、ガハッ！！」

篠原亜美「……誰か…助けて……」

原田俊也「へへへ、いつもこいつも、俺に楯突くから悪いんだよ」

氷室彰「彼女、怖がつてるじゃないですか」

そして忍び寄る謎の声……。

「……?」
「力が欲しいのか……?」

第2話・INDIGO 骸骨と剣士

彰と鈴奈は傷だらけ（半分くらいは鈴奈のパンチによるもの）の翔を、鈴奈達の家でもある喫茶店「サン・ライズ」に運びこんだ。そこは住宅街の中にあるレトロな外観の店で、店主・旭奈津子^{あさひなつこ}が1人で切り盛りしている。

奈津子は鈴奈の母親の姉で、鈴奈が大学進学した時に「距離的にちよどいい」という理由で住まわせており、翔が住む家がないと言った時も、「ついでに翔くんも住んじゃえば？」と言って部屋を貸してくれた人なのだ。近所でも、懐の広い姉御的な性格で知られている。

「うわぁ……、それにしても、翔くんスゴイ傷だね……。一体何があったんだい？」

奈津子はすぐに店を閉めた後、翔の傷の手当をしながら鈴奈に事情を聞いていた。

「翔ちゃんが不良に絡まれていた女の子を助けに行って、ちょっとやり過ぎちゃったの……………」

「や、やり過ぎたって何だよ？ 追い討ちかけてきたのは鈴な^ながばぁ……！？」

鈴奈は翔が余計な事を言わないように口を両手で塞ぐ。

「あ、それとね。この人が間に入って、女の子と翔ちゃんを助けてくれたんだよ？」

「んんん！！んん、んんんんん！！（違っつて！！オレも、その子を助けたんだよ！！！！）」

鈴奈は彰を指して奈津子に紹介した。口を塞がれたままの翔が必死に訂正するが「ん」という単語にしか聞こえない。

「へえ、そうだったの……。彰くんだけ？今日はありがとね」

「いえ、鈴奈サンが助けに行こうとしていたので、流石に危ないかなあと思ひまして……………」

「だったら尚更だよ。まったく……、あの2人は小さい頃から仲良かったんだけどね…………。2人共、思ったら一直線な性格でさ。どつちかが怪我して帰って来るなんてしょっちゅうなんだよ」

彰が奈津子と話している間に、翔が鈴奈の拘束から脱出する。

「…このヤロ…………ぶはあっ！！…………ハア…ハア…………」

「あ、ごめん。苦しかった？」

「鈴奈！！なににも鼻まで塞ぐことないだろ！？死ぬかと思ったぞ！？」

「仕方がないじゃん！！さっきは翔ちゃんが……………あれ、何でだっけ？」

「ハア！？」

翔と鈴奈のやり取りをニコニコと見ていた彰は口を開いた。

「では、僕はそろそろ帰りますね」

「ん？もついいのかい？」

「はい。研究所で助手が待っているのです……」

彰は入り口の所に行き、ドアを半分くらい開けた所で立ち止まり、

「あ、そうだ。翔くん、今度時間ができたら、僕の研究所に来てく
ださい。見せたい物もありますし。それじゃ、また」

と言うと、軽く会釈して店を出ていった。

「翔ちゃんに見せたい物って何なんだろうね？……って翔ちゃん、
大丈夫！？」

翔は鈴奈と言い荒らそっていた時、押し飛ばされた拍子に机の角に
顔をぶつけて鼻血を大量に流していた……。

「……い、や……ダメ……かも……」

翔はそのまま仰向けに倒れて気絶してしまった。

「サン・ライズ」を出た彰は、ジーンズのポケットから針のついた
計器を取りだし、しばらくそれを眺めてポツリと、

「反応が消えている。やはりあの時か……」

そう呟きと、計器をしまいながらスツと体の向きを変えて夜の住宅街を歩いて行った……。

それから数日が経った、その日は鈴奈は大学へ行っていて、そして翔は喫茶店で働いていた。今は奈津子が買い物に行っていた為、翔が1人で店番をしていた。

「いやあ、すっかりお前の喧嘩っ早いところは相変わらずだよなあ」

「うつせえよ……。それに今回は女の子をだなあ……」

「いやいや、翔っちが喧嘩する理由っていったら大体が女の子絡みだったつしょ？」

翔の高校時代からの悪友、馬場隆治ばばろうぢがカウンターでコーヒを飲みながら翔と話し込んでいた。

「そんなに女の子達にフラグ立つような事してたらさあ、いつか鈴奈ちゃんに愛想尽かされちまうぜ？」

「は？鈴奈がどうかしたのかよ？」

隆治はニヤニヤしながらからかうが、翔は相変わらずの鈍感体質を

発揮する。

「（マジ？翔っち、まだ気付いてないのかよ……？）……いや、やっぱ何でもねえや」翔の鈍感さに呆れと懐かしさを感じて、隆治は思わず話題を変える。

「そういえば最近聞いた話んだけどな……。一応、翔っちの耳にも入れておこうと思うんだ」

「おつ、久しぶりの情報通が来たね？今回は何なんだ？」

隆治は高校時代、仲間内では情報屋で通っていた。その情報収集能力はかなりのレベルに達している。彼のおかげで、翔が退学を免れたという過去もある。

「この数日で、いくつかの建造物が相次いで倒壊してるんだ。被害はまだ小さいし、ほとんど夜に起こってるから、表沙汰にはなっていないけど……。それも爆発とか交通事故とかじゃなくて、何かで切られたような跡なんだって。しかも全ての被害で共通してると来たもんだ」

「……………偶然……………じゃなさそうだな……………」

店内には2人しかおらず、先程と打って変わって深刻な雰囲気になっていた。

「たぶんね……。それと、この話を翔っちに話しておこうと思ったのは理由があるんだ。この事件が最初に起きたのは、翔っちが喧嘩した所の近くなんだよ。なんか変わった物見たり聞いたりしてないかな？と思った訳よ……………」

「……うーん……変わった物が……」

翔は右手人差し指を額に当てて考え始めた。……あの時、いつもと違っていた事……そんな非日常な事件が起きるようないきつかけ……

……

「……いや、特に思い当たる事はないかなあ」

「………そっか、わかった。じゃあ何か見つけたら、互いに連絡し合うつて事でよろしくな。あ、コーヒーうまかったぜ。店主さんに比べりゃまだまだただけど……」

「悪かったな、まだまだだよ……!」

翔が怒っているのを見て隆治はニツと笑い、コーヒー代をカウンタ―に置くと、「じゃあな」と言つて店を出ていった。

「………一応、見ておくか……」

隆治がいなくなった後で翔は1人考え込んでいた。

時間は昼近くになり、「サン・ライズ」には奈津子が買い物から帰つて来ていた。翔は昼休憩の時間を利用して、先程隆治が言つていた現場を観てまわっていた。

倒壊現場を数ヶ所廻った翔は一番最後に、3・4日前に自分が大立

回りを演じた場所に来ていた。

「……………確か、此処の近くであつたんだよな……………」

辺りを見れば確かにいろいろな所に、切り傷のような跡があつた。だが周囲の人々は気に留める様子もなく、とても此処が今まで見てきた倒壊現場と関連があるとは思えなかった。他の場所は規制線が貼つてあつたり、瓦礫が散らばつていたりしていたのにだ……………。

「一通り見てみたけど、やっぱり何もないなあ。……………そろそろ戻るかな」

翔は喫茶店に帰ろうと歩き出した。その時、

ズガアアアアン！！！！

きゃあああ！！

グウガアアアア！！

爆音、悲鳴、雄叫び。それらは翔の背後でほぼ同じタイミングで、日常に浸つていた繁華街の空気を震わせた。

「な、なんだ！？……………つてうおっ！！なんなんだアイツは！？」

慌てて振り返つた翔の200メートルぐらい先には、黒の体に白いパーツを散りばめた人型の怪物がいた。その姿は人骨のほとんどを外に露出させたミイラのように、左腕には亀の甲羅ように平たく、ゴツゴツとした盾をあり、右腕は人の手の代わりに長くギザギザした刃物が生えていた。

『グウウウウウ……………』

怪物は静かに唸りながら此方へ近づいて来た。翔は怪物の顔に視線を移す。頭蓋骨のような仮面の奥には殺気を帯びた赤く鋭い目がギラギラと妖しく光っている。翔はその目に吸い込まれてしまいような感覚に陥り、視線を逸らすのを忘れていた。

「……………はっ！！」

翔がふと我に還り周りを見渡すと、人々が慌てて逃げ惑っていた。会社員も、子連れの母親も、互いを押し退け合いながら、我先にといわんばかりの形相で走って行く。無理もない。突然の非常事態に落ち着いて行動できる人は少ないだろう。……………そうこうしている間にも怪物と翔の距離は縮まっていく。

「や、やばい……。逃げなきゃ、逃げなきゃ……………」

翔が走り出そうと足を動かした瞬間、

『グオオオオオオオ！！！！』

怪物が右腕を降り下ろすと、刃先から衝撃波が飛び出す。衝撃波は走る人々の前方にある外灯に当たり、大爆発を起こした。周りにいた翔達は四方八方に吹っ飛ばされる。

「ぐっ、うあああ！！！！」

翔はかなりの距離を飛ばされ、怪物とは2・3メートルしか離れて

いない場所まで転がった。

『グウウウウ……!!』

「く……くそっ!!」

翔はすぐに起き上がろうとするが、体の至るところを打っているため思うように動けない。怪物がゆっくりと近づき、右腕の刃物を高く構え、翔めがけて力強く降り下ろす。

「チクシヨウ……、こんな事で死ぬのかよ……」

翔は覚悟を決め、目を強く瞑った……。

翔はふと不思議に思った。タイミングではもう当たっているはずなのだが、まったく痛みを感じなかったのだ。死ぬ直前くらいは流石に痛いだろうと思っていた翔はゆっくりと目を開けた。

だが目の前にあったのは白い刃ではなく、コバルトブルーの物体だった。目を強く瞑っていたせいで視界がボヤけ、物体の姿をすぐに確認する事が出来なかったのだ。時間がたつにつれ徐々に視界が晴れていき、その全体を見る事が出来た。

そこにいたのは1人の剣士。しかし、姿が普通ではない。コバルトブルーのボディに白いラインが入っていて、ゴツゴツした藍色とライトブルーの鎧が肩、胸部、背中についている。顔はボディと同じくコバルトブルーで、顔面の中央を縦にまっすぐ黒のラインが走り、その左側には「Z」の字を菱形に崩したような目があった。それを鏡合わせにした形の目が反対側についていて、両目共にオレンジ色の光を放っていた。目の下からは2本の白いラインが出ていて体のラインに繋がっている。額には鎧と同じようなカラーリングの大きな角飾りがあり、そこからサーベルの刀身をイメージさせる角が4本、両目をそれぞれ2本ずつで覆うように下向きに伸びている。腰には藍色のバックルが中央にあるベルトが巻かれていて、彼の顔をイメージさせるロゴが刻み込まれていた。そして右手にはダークブルーと黒の剣が握られている。

翔はそれを、何処かの化学機関が作ったロボットだと思ってしまった。だがボディラインを見る限り、その剣士は成人男性の姿をしている。彼は手に持った剣で怪物の一撃を受け止めていた。黒の柄には白い「Z」を模した模様があり、鰐の部分は無骨な機械になっていて、そこから日本刀のような刀身が飛び出していた。

「……………フツ！！…ハツ！！」

剣士は剣をおもいつきり振り抜き怪物の腕をはね除け、素早く攻撃の構えをとると、怪物の胸部に3・4発の突きを入れる。

『グガッ！！』

怪物は火花を散らしながら5m程吹き飛ばされた。何故生物のような姿の怪物が火花を出すのか翔は不思議に思ったが、今の状況では答えてくれる人がいないのと、全身に激痛が走るせいで、ヨロヨロと黙って立ち上がる事しか出来なかった。翔が立ち上がるのを見た

剣士は、左手で翔に「もっと離れるように」という仕草をした。

「え……、あ……はい」

翔が言われた通り剣士から距離をとる。剣士は剣の鰐にあるスロットから縦8センチくらいの青いメモリーカードを引き抜き、代わりに赤い同形のメモリーカードを取りだしてスロットに差し込んだ。

「バーナー……プレスキャン」

電子音が流れると、剣の周りを藍色のノイズが覆い、剣の形が変わっていく。

そしてそのノイズが晴れ、刀身は赤く巨大な両刃に変わった。

怪物はすでに起き上がっていて、そして右腕の刃の形状を巨大な斧に変化させていた。それを見た彼は鰐の上部にあるトリガーを剣の柄に向けてスライドさせる。

「バーナー……ファイナルスキャン」

再び電子音が流れて、刀身が高熱を帯び、白く発光し始めた。周りの空気が熱気で揺れている。剣士はゆっくりと切っ先を怪物に向け、怪物に向かって走り出す。怪物も大声を挙げながら剣士に突進してきた。

「はああああああ……!!」

『グウウアアアア……!!』

走り出したのはほぼ同時だった。しかし、攻撃では剣士の方が一瞬早く、怪物を高熱の剣で十字に切り裂く。

『……………グウウウオオオオ！！』

怪物は火花と炎を纏い、断末魔の叫びを上げて爆散した。

剣士は一息ふうつと息をつく、翔のいる方に向き直った。そしてスロットからカードを引き抜くと、ベルトの右腰にある斜めに入ったスリットに鐔の部分を押し込む。ちょうど刀を鞘に納めたような状態になった剣はピピツという音を鳴らしながら光とノイズに包まれていく。そのノイズは全身を包み込み、ノイズが消えるのと同時に青い装甲がなくなっていく。完全に装甲が消えると、そこには翔には見覚えのある青年がいた。

「……………っ！？…彰さん！？」

黒髪の青年、氷室彰が先程の青い剣士のいた場所で真剣な眼差しをして立っていた。

第2話・INDIGO（骸骨と剣士）（後書き）

彰「……………ええと、確か此処でよかったハズですけど……………。にしても暗いですね。」

???「彰君、来たようだね……………」

彰「おや？この声は……………」

パァッ！！（灯りがついた）

彰「うつ、まぶしい！！」（・<）ゞ

みやび「どもども！！！！作者のみやびわたるです。」（¥ ¥）

彰「みやびくん、照明明るすぎですよ。ちょっと絞って下さい。」

みやび「いやあ、初だから張り切りすぎちゃって……………。ところで彰君、今回からこのあとがきのスペースでコーナーを始めるんだよ。」
（ 照明の明るさを絞る ）

彰「そうでしたね。確か名前が……………」

みやび「ああ！！ストップ！！！！ちゃんと掛け声があるんだよお。」

「ゴニョゴニョ……………」

彰「……ああ、なるほど。それじゃあいきます。『彰と、』」

みやび「『みやびの、』」

彰・みやび「『あとがき、対BANG!!!』」

みやび「さあ、始めました、『あとがき、対BANG』。このコーナーでは、本編キャラをゲストと呼んで、読者からの質問に答えてもらったり、どうでもいい雑談とかしようぜ、というざっくりした内容でお送りします。」

彰「ざっくりしすぎでしょ……。っていうか『対BANG』ってどういう意味なんですか？」

みやび「元々『対バン』は複数のバンドと一緒にライブをするって意味なんだけど、今回のMCとゲストが語り合っっていうのに掛けてみました。英語にしたのは海苔です……。」「イェーイ」() ¥

彰「ノリの字が違いますよ？なんで海苔なんですか？もしかして食べたいんですか？パリッパリのを食べたいんですか？」

みやび「うおっ、いきなりツツコミの応酬がきた!!!!」「？」()

彰「……なんか、ちゃんとしたツツコミ役が欲しいですね。僕とみやびくんじゃテンションに差ができます。それに疲れますし……。」

「

みやび「じゃあ、彰君の助手の人を連れてきてよ。あの人ならいいッッコミできると思うしね。」

彰「ちゃっかり次回予告になってるんですけど……。まあ、わかりました。次回は連れてきます。」

みやび「よし、決まりだな。おっと、そろそろお別れの時間だあ。
『あとがき、対BANG』では、皆さんの感想をお待ちしてます！
！！」

彰「いやいや、基本的には『ブレイヴ』の感想ですよ！？対バンは
ついでですから！！」？）（

みやび「それではまた次回、お楽しみに〜。」＼（）＞＜（）／

第3話・NEGATIAR〜兵器とメモリー〜（前書き）

ええと、みやびわたるでございますヾ（ ）ヾ

更新する日をちゃんと決めてから、執筆に意外と余裕ができました
（〃 〃 ; ）ヾ

なにせ学業との両立に、一番最初はてんでこ舞いでした……………＼（
× × ）／

止まらないように踏ん張りまくる今日この頃です……………。それでは第
3話、スタート！！！！（・ ・ ）

前回までの『仮面ライダーブレイヴ』は……………、

鈴奈「この人が助けてくれたんだよ？」

奈津子「彰君だっけ？今日はありがとね」

彰「翔くん、今度僕の研究所に来てください。見せたい物もありますし……………」

ある日、翔達と出会った謎の青年、氷室彰。

隆治「この数日、いくつかの建造物が相次いで倒壊してるんだ。それ
れも、何かで切られた跡なんだって」

怪物『グウウガアア！！！』

翔「チクシヨウ……、こんな事で死ぬのかよ……」

??『……フツ！！……ハツ！！』

翔の目の前に突如現れたドクロの怪物と、青い剣士……！！

「バーナー……ファイナルスキャン」

??『はああああああ！！！！』

怪物『グウウアアア！！！！』

怪物を倒した剣士の正体は……、

翔「……っ！？……彰さん！？」

第3話・NEGATIAR兵器とメモリー

とある場所に古い平屋がある。時代に取り残された化け屋敷のような外観は、何処か近寄り難いという雰囲気醸し出していた。しかし巷では、「4・5年前からあの家に若い男女の幽霊が出る。白い服を来た2人の人影が出入りしている」などといった噂が回っているという。

「まあ、そういった噂が流れるのは仕方ありません。厳密に言うとな不法侵入ですし」

「侵入……っていうか違法増築ですよ？これって……」

湿っぽく、所々にポツポツと照明がついている薄暗い通路を、氷室彰と笹原翔は足早に進んでいた。

「ハハハ、違法じゃありませんよ。此処はかつてある機関が合法的に造っていた秘密研究所です。僕はそれを“借りているだけ”です」

「だからってボロい平屋の地下をぶち抜かなくても……」

案外、幽霊とかの正体は意外な物だったりする。「化け屋敷の幽霊」の噂は、数年前から彰が平屋の地下にある研究所に住み始めた事が原因だったのだ。翔は驚きと呆れで、それ以上何も言う事が出来なかった。しかもそれ以前に聞きたい事もあった訳で……。

「……………着きました。此处です」

目の前にあったのは、何処かの事務所の物を取って付けたような曇りガラスの扉だった。鍵はついておらず、研究所という事を考えると防犯面的に非常に無防備である。彰は「大丈夫です」とでも言うように何食わぬ顔でドアを開けて中に入って行った。

「（中也ボロかったりして……………）」

翔が不安がりながらドアをくぐると、そこは先程の湿っぽい通路からは想像もつかないほど広く清潔感溢れる空間で、ドラマなどで見えないような謎の機器がたくさん設置されていた。翔が「オレ、今日は驚きっぱなしだな」などと考えていると、

「ようこそ我が研究所へ。僕は此处で所長をやってるんですよ……………
といっても2人しかいないんですけどね。ハハハハ……………」

彰はニコニコと満面の笑みを浮かべながら機器の説明を始めた。さながら目をキラキラさせて話す子供のようである。

「これは、高性能の地雷除去装置です。対人だろうと対戦車だろうと辺りの地雷を全て見つけ出し、特殊な破壊電波で使用不能にさせるんです。あとこれが携帯式の緊急用シエルター。一見するとただの分厚い鉄板ですけど、高熱を感じると一瞬で5メートル四方の核シエルターになります。耐熱温度は約5000度。あとこれが……………」

「あの、彰さん？そろそろオレを質問……答えてくれませんか？」

翔は彰の説明を遮って、話を本題に戻すように促す。それを聞いて我にかえった彰は、申し訳なさそうに頭を掻いた。

「……すみません。つい夢中になっちゃって……。さっきの怪物について……。ですよね……。……わかりました。話します」そう言うと彰は急に真面目な顔になり、フウツと息をついてから、再度口を開いた。

「あの怪物は“ネガティア”と呼ばれています。“センチメントメモリー”に内包された“フリーリウム”を物質化させたクリーチャーです」

「……え？ネガティア？……。センチメント？フリーリ？なんでですか？それって……」

翔はまったく聞いた事もない言葉の応酬に困惑してしまった。ネガティアは先程の骸骨の事だという事までは解った。しかしセンチメントメモリーだのフリーリウムだのと突然言われても、頭がまったくついてこれない。頭の上に「？」がたくさん浮かんでいる感じがだ。

「……20年前、奇妙な鉱物が発見されました。その鉱物は不思議な事に、周囲の生物が抱く感情に反応して形状や性質を変えろという力があつたんです。科学者達はこの鉱物を“フリーリウム”と名付け、世界中の科学者が科学の進歩のためにこぞって研究を始めました。“感情に反応して形を変えるなら、それを意のままに操ればどうなるのか”ってね。」

「感情で形を変える……ですか……」

「はい。その研究は見事成功し、“世界中の様々な情報を感情だけで物質化する技術”ができたんです。すぐさま実用化に向けて開発が進んでいきました。が、やがてそれを“兵器”として使おうとしたグループが現れました。そういった思想の拡大を防ぐために世界で行われていた研究のほとんどがストップされました。そして今から10年前、そのグループが再び研究を始めたという噂が研究者の間で流れたんです。」

彰はおもむろに懷から藍色のメモリーカードを取り出し、それを翔に見せた。

「これがセンチメントメモリー。先程話した技術を応用して、戦闘装甲を物質化させる物です。いずれ完成するであろう“兵器”に対抗するために作られたんですよ。」

「それってさっきの……って事はネガティアってその“兵器”の事なんですか？」

翔の問いに、彰は首を縦に振った。

「正確に言うとなガティアは、“兵器”を他の者が強奪して、更に改良した物です。“兵器”の技術を考案した科学者グループは、研究を再開して数年後に全員殺されたそうです…。そんな事もあって今では科学者の世界でフィーリウムといえば、戦略的な道具としか扱われなくなってしまうています。最初は文化を進歩させる希望の光なんて呼ばれていたのに、“兵器”だなんて……」

そう言う彰は、やりきれないといった表情をしていた。フィーリウムを戦いに利用しようとした事も許しがたいが、それを利用するためだけに人の命を奪える者達はもっと許せないのだろう。

「……………フィーリウムは、世間的にはあまり知られていません……………。世界でも一部の人間しかその存在を知らない……………。それが事態を更に悪化させてしまっているんです……………。一般人に知識がない事を利用して、ネガティアという“兵器”で罪のない人達をたくさん傷つけている……………！！作った動機なんて関係ない……………僕は……………ネガティアを作り出した人達を絶対に許さない！！この手で必ず見つけ出す……………！！」

息を荒くする彰に先程までの余裕はなく、拳を側にあつた机に叩きつけていた。歯をギツと食い縛り、全身から湯気が出るのではないかという程の圧気を放つ彰に、翔は圧倒されていた。そこまで怒りを露にするなんて、この人の過去に一体何があつたのだろうか。翔はそう聞こうして、すぐに言葉を飲み込んだ。これ以上、赤の他人である自分が踏み込むべきじゃない、と……………。しばらくの沈黙……………。そして落ち着きを取り戻した彰が口を開いた。

「……………はあ……………、すみません。熱くなつてしまつて……………。とにかく……………キミを此処に呼んだのは、キミにある提案をしたかつたらなんです」

「提案？なんですか？」

「はい。……………実はキミに……………」

彰が何かを言いかけた時、突然、部屋中にサイレンが鳴り響いた。

彰は近くにあったマイクに駆け寄り、無線の向こうにいる誰かと話し始めた。

「優里ちゃんですね……はい………何処ですか？………」 榎実公園
「………わかりました。すぐに向かいます」 マイクのスイッチを切った彰はサッと振り返り、翔の所まで走ってくる。

「翔くん、この話はまた後でお話しします。繁華街の時のネガティブがまた現れたみたいなので……。僕は現場に向かいますので、キミは此処で待っていて下さい」

「繁華街のヤツって、彰さんがやつつけたんじゃ………」

「いえ、本来ネガティブの完全態は、人間がフイリウムでできた鎧を纏って生まれます。鎧をより強固な物にするため、作動してしばらくは鎧のみが独立して行動し、暴れまわって鎧の能力を高めていきます。そして鎧の強化が終わった所で人間に融合、完全態になるんです。鎧はただのエネルギー体なので、たとえ破壊しても再び何処かで復活してしまうんです。これを止める方法は、所有者の持っているネガティブ用のメモリーを破壊する事、それだけなんですよ………」

鎧を破壊してもその存在が消える訳ではなく、更に強化された鎧と戦う事になる。つまり、一体のネガティブを倒すのに、運が悪ければ何回も戦わなければならないのだ。あまりに現実離れた彰の言葉を、翔は何とか理解する。実際にこの目で見ている事もあって、さつきよりは飲み込みが早かった。

「とにかく、翔くんは一度ヤツに顔を見られています。申し訳ありませんが、僕が戻って来るまで此処で待機して下さい。いいですね

「!!」

「あ、ちょ……ちょっと……」

翔の返事を聞く間もなく、彰は猛スピードで部屋を出ていった。気がつけば翔だけがポツンと取り残されていた……。

研究所を飛び出し、公園にダッシュで向かっていた彰はふと考えていた。翔に提案しようとしていた内容は、本来の彰自身の考えとは正反対の物だった。本当ならそんな事はしたくない。だが最近は、そんな我が儘を言っていられる状況ではなくなってしまっているのも事実……。

「……………ああ、ダメだ!!今はネガティアに集中しなければ……………!!!!」

榎実公園は大きな噴水があり、近所の住民にとって憩いの場になっている。そんな場所で暴れられれば、大惨事になりかねない。それだけは阻止しなければならない……。そして彰が公園についた時には既に怒号が響き渡っていた。

「グゴオオアアア!!!」

骸骨を身に纏ったような怪物、ネガティアは辺り構わず暴れまわっ

ていた。幸いにも人はいないようだ。彰は持っていたダークブルーの剣をかざして、ネガティブに向かって叫ぶ。

「破壊のフィーリウム、“スケルトン・ネガティブ”！！アナタの鎧、破壊します！！！」

彰は剣を右腰に当てがった。すると機械から帯が飛び出し、腰を一周して鎧の部分にカチャリとはまる。そして藍色のセンチメントメモリーを取り出して鎧の側面のスロットに差し込んだ。

「ゼントル……………スタンバイ」

電子音に続いて剣からは、ブウウン、ブウウンというバイクを吹かしたような音が鳴り始め、徐々にそのテンポを上げていく。音がブンブンというテンポにまでなった所で、彰は右手で剣の柄を握りしめ、再び叫んだ。

「……………変身！！！」

「ゼントル……………セットアップ」

ベルトから剣を勢いよく引き抜き、頭の上に高々と掲げた。電子音が流れ、引き抜いた時に発生した青白い光が彰の体全体を包み込んでいく。そして包み込んでいた光が弾け消えた時、彰はその姿を変えていた。コバルトと白のボディ、ダークブルーのアーマー、顔を覆い隠すような角飾り。そして「Z」を模したオレンジ色に光る複眼と逆手で持ったダークブルーの片刃剣……………。

「“カライドライダーギア・ゼントル”。完全態になんかさせはしない。必ずアナタを破壊します！！！」

ゼントルは片刃剣、“ゼントルドライバー”を素早く順手に持ち変え、スケルトン・ネガティアに突進して行く。スケルトン・ネガティアも右腕を大きなサーベルに変え、ゼントルの攻撃を迎え撃った。そしてそんな光景を、影からじつと眺める者がいた。

「いいじゃねえか……………面白え…面白えよ…………。さて…………そろそろいくかな……………」

彰「ですね。なので今回の対BANGはその用語解説をしたいと思っています」

みやび「今回は“センチメントメモリ”と“フィーリウム”についてです。今のところ、彰君が変身するための青いメモリと、炎を出す赤いメモリーの2枚が登場してるね」

彰「本編でも語られていたように、生物の感情を吸収して形状や性質を変える“フィーリウム”という鉱物でできています。内包された情報を引き出して、それに準ずる姿に変える事が出来る、近未来物質です。“ネガティア”も同じ要領でできているんですよ。ネガティアの場合は、フィーリウムが情報に準じた形に変化した動く鎧になるんです。そこに人間が融合されて“ネガティア・完全態”に変化し」

みやび「あー、要は仮面ライダー特有の、敵同士で同じツールを使うってパターンだね」キラン（　　）

彰「そこ！作者だからってメタ発言はしないで下さい！！あと話被せないで！！」？（。。；）

みやび「いやあ、彰君の話長いからさあゝ。尺の関係でね……」

彰「随分変な所でカットしましたね……」ブー（　　）

彰「ところで、前回で登場した剣士（彰）の名前、ついに出てきましたね。“カロードギア・ゼントル”。表記は“ゼントル”ってなっていましたけど……」

みやび「まだスペックは語れないけど、近々キャラ紹介の回を書くつもりだよ。タイトルに書いてある“仮面ライダーブレイヴ”ももうすぐ出てくるしね。」

彰「今回は助手の子は出てくるんですね？」ギラッ（　　）

みやび「う、視線が殺気を帯びている…。だ、出しますよ。…それではまた次回」ヒヤヒヤ（ハ　ハ　ハ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8010x/>

仮面ライダーブレイヴ

2011年11月17日19時14分発行